

スミスとマルクス：労働価値説の相違をめぐって

時永, 淑 / Tokinaga, F.

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

52

(号 / Number)

3・4

(開始ページ / Start Page)

5

(終了ページ / End Page)

39

(発行年 / Year)

1985-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030453>

スミスとマルクス

——労働価値説の相違をめぐって——

時 永 淑

はじめに

- I スミスにおける「経済人」
- II 初期マルクスの社会像認識
- III 「経済学批判」体系化の基本視角
- IV スミス労働価値論の特徴
- V 結び

はじめに

スミスとマルクスという場合、長年気にかかっていた忘れられないのは、かつて大内兵衛氏が「やがて死ぬべき定めではあるが、なかなか死なぬのがスミスである」と述べていた言葉である。¹⁾私には、これがどういう意味であるのかということが、私なりに一つの大きな問題であるように思われた。「死ぬべき定め」というのはどういう意味なのであろうか、また「なかなか死なぬ」というのはどういう意味なのであろうか、これらのことが私にはど

うも納得のゆくようには理解できなかったわけである。最近では、結論を先に言ってしまうえば、次のような意味にはとれないだろうかと考えている。つまり、「死ぬべき定め」というのは、マルクスがスミスを文字どおり批判し尽くしてそれを克服していたのであれば、それならばスミスも安んじて死ぬことができたのではないだろうか。ところがマルクスは、実はスミスを「経済学批判」の対象として十分に批判し尽くすということになっていなくて、まだ問題を残しているのではないだろうか。とすれば、これではなかなかスミスは死ぬにも死ねないのではないだろうか、ということである。この点についてはマルクスのほかに直接スミスを批判の対象としたリカードウなどとの関係においてもいろいろな問題が残されているように思われる。ここではスミスとマルクスとを対比的にとりあげ、さらに経済学の理論体系を根本的に左右する関係にある労働価値説の両者の見解の相違という点にしぼって、つまり Labour theory of value というときの、この Labour (労働) の考え方、それから value (価値) の考え方——これらはマルクスとスミスとではもともとその理解がかなり異質であり、そのためにマルクスは十分なスミス批判ができなかったのではないだろうかと思うのだが——、その点にしぼって述べてみたいと思う。

そこで議論の順序としては、まずアダム・スミスをとりあげ、そのあとマルクスをとりあげて、両者を比較検討しつつ、残されている問題を明らかにしてゆくことにしたいと思う。

その前に、あらかじめ次の点を断っておきたい。すなわち、従来私の経済学史の研究は理論史を中心としてきたことから、思想史とかあるいはその背景をなす歴史的な時論的な問題等々を無視しているというように読み取られがちであったという点である。しかし、私自身はけっしてそのように考えてはいない。⁽²⁾ それぞれの経済学者の歴史的な背景、時論的な問題、時代的な制約、諸思想の影響や各経済学者自身における思想形成、これらのものをとおさなければ本当の理論というものはでき上がってこなかったであろう。こうした各経済学者の成立史的な問題を扱

うことによって各経済学説の独自の理論的性格を解明することと理論史そのものの研究との関係にしても、その主題を異にするとはいえず、密接な関係にあることは言うまでもない。私自身けっして前のほうの問題を無視するとか軽視するつもりはまったくない。ここでも、スミスとマルクスとの理論的性格の相違をいっそう明らかにするために、理論史と他の諸領域との区別と同時に、両者が密接な関係にあることにも考慮を払いながら議論を進めてゆきたいと考えている。

注(1) 大内兵衛、松川七郎訳、アダム・スミス『諸国民の富』Ⅱ、岩波書店、一九六九年、一三一九ページ(岩波文庫版、第五分冊、一一五ページ)。ここでは、この大内氏の言を大内氏自身がどのように解されていたかということ自体を問題にしようというのではない。私なりにそれをマルクスとの対比において両者の労働価値説の相違の問題として考えてみるということが課題である。

(2) この点について詳しくは、時永淑『古典派経済学と資本論』、法政大学出版局、一九八二年、「第一部 経済学史の方法論」に所収の諸論文を参照されたい。

Ⅰ スミスにおける「経済人」

まずアダム・スミスについてであるが、スミスとマルクスとの労働や価値の概念、それらに基づく社会像認識の相違という点に関連して、ここで直接関連があると考えられる論点を取り上げることから始めることにしたい。

先年亡くなったR・L・ミークは、周知のとおり『スミス、マルクスおよび現代』という本のなかで、新しい資料を利用して貴重な研究成果を発表しているが、そのなかで彼が特に強調しているのは、これも周知のとおり、いわゆる「四段階説」の考え方である。⁽³⁾ミークは、この「四段階説」の考え方がかなり早くからスミスにあったこと

を資料的に裏づけている。彼の整理によると、その思想潮流の第一は、プーフエンドルフ（グロチウスもはいるのだろう）などの大陸の自然法学の考え方（所有権の起源と発展に関する研究）——ミークはこれを「J・ロックと結びつけて「プーフエンドルフ・ロック伝統」と呼んでいる——、そして第二の思想潮流は、アメリカのインディアン諸部族についての一連の研究——これはもう一つ別の独立の本として出されたものにまとめられている——、要するに原始未開の社会との対比的関係で文明社会を考えてゆく考え方、さらに第三の思想潮流は、いわゆる神の摂理の歴史観、J・B・ボッシュエの『世界史論』[Discours sur l'histoire universelle]によって知られるような歴史観——これはむしろテュルゴのほうが大きな影響を受けたとミークは述べている——である。⁽⁵⁾これらの思想潮流が、スミスにおいて「生存様式」[Mode of existence]「史観の考え方を生み出す素地になったのではないかとミークは言うわけである。そして彼は、これはマルクスにおける唯物史観が彼の経済学の生成にとってもった役割と同様の役割をもつことになったのではないかということ強調している。⁽⁶⁾

ところで、私がこのようなミークの考え方に多少の違和感を覚えたのは次のようなことからである。すなわち、イギリスにおける自然法思想の伝統には確かにこのような一面があることを否定できないが、しかし、それは多分に大陸の自然法思想の伝統とは違っており、むしろ社会契約説を土台におきながらもそれとは対比的に、特にスミスの場合、初期のハチソンの考え方やマンデヴィルの考え方、それにヒュームの考え方等々をとおして、いわば個人のなかにそれ自身で社会を形成してゆくというような原理、つまり自発的に社会を形成してゆくという原理、言い換えると「同感 sympathy」の原理——これは『道徳感情論』の冒頭部分に書かれている⁽⁷⁾——がスミス自身の思想としての形成過程をたどり、この「同感」の相互規制によって利己的な個人ではありながらその発動がおのずからそこに社会を形成してゆくという考え方、これがスミスにおける「経済人 Homo oeconomicus」として結晶し

ていったのだろうということである。とすると、歴史的な発展過程を「四段階説」として把握することを可能にした思想潮流にたいして、他面、それと併行的に、個人を社会の基本的要素とし、その個人自身のなかに社会的關係を形成しうる原理、つまり「同感」の原理を「性向 Propensity」として認め、それによって利己的な行動が自発的に社会を形成してゆき、これが当然に自動調整の機能をもって社会の秩序をつくってゆくという思想潮流、つまり経済的に言えば等価交換の世界を実現させることになるような考え方、に結実してゆく方向が發展してきていたことを見落とすわけにはゆかないであろう。この点はすでに思想史の分野で——たとえば A・L・マクフィー、日本では高島善哉、水田洋、星野彰男氏などによって——研究されているところである。要するに、スミスは、個人そのもののなかに社会形成の原理が「同感」に基づく「交換性向」として内在するという見地から社会的な法秩序なしいは経済秩序を明らかにしようとしたのであって、このような考え方は、それ以前の思想潮流のなかで用意されながら、最終的にはスミス自身の思想形成過程のなかで生みだされたのである。

このような『道徳感情論』や『諸国民の富』の基礎にあったスミスの考え方を、果たしてマルクス自身は十分に読み取っていたのだろうか。マルクスが『道徳感情論』を読んだという形跡は、少なくともマルクスの著作のなかには見いだすことはできない。ただ一箇所、『資本論』第一巻第二三章にある注(76)で『道徳感情論』のことが触れられているが、その箇所の叙述(9)からしてもマルクスが果たしてその本を読んだのかどうかは疑問である。

このようなスミスの考え方、つまり彼の「経済人」の考え方は、思想的には日本ではかなり高い水準の研究成果が見られる。ここでは、その思想的分野からする研究成果を再検討しようというのではない。むしろ、それらの研究成果を前提しつつ、スミス自身における「経済人」の考え方が『諸国民の富』のなかでどのように経済学の理論化として現われているか、この点を究明し、従来のスミス研究のなかではまだ十分に解明されているとは思わ

れない点に触れておくことが問題である。もちろん、ここではそのすべてを尽くすというわけにはいかない。ここのマルクスとの対比的考察は、その問題を経済学の理論上の問題として鮮明化しておくためのものと言いうこともできる。以下では、その点に留意しつつ、まずマルクスの社会像認識を価値実体と価値尺度という経済理論の基礎範疇の理解そのものとしてほりつつ見ておこうとから始めよう。

- (3) Ronald L. Meek, *Smith, Marx, & After: Ten Essays in the Development of Economic Thought*, London 1977. (時永淑訳『スミス・マルクスおよび現代』法政大学出版局、一九八〇) 特に同書「第一部 マダム・スミス」所収の第一、第三、第四論文を参照せよ。
- (4) R. L. Meek, *Social science and the ignoble savage*, Cambridge, 1976.
- (5) Meek, *Smith, Marx & after*, pp. 30—32. (注前掲訳書、五四—五八ページ)
- (6) Meek, *ibid.*, pp. 15—16, 18—19. (前掲訳書、一五—一七、三一—三四ページ) なお、ミックのこのような考え方にたいしては、私自身の疑問点は、この邦訳書巻末の「訳者解題」のなかで指摘しておいた。(前掲訳書、三六—三七ページ)
- (7) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments...*, Edinburgh 1759 (6th ed. 1790); *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, 6 vols., Oxford 1976—88, Vol. 1, Part 1, sect. 1.
- (8) Alec L. Macfie, *The Individual in Society: Papers on Adam Smith*, London 1967 [舟橋喜恵、天羽康夫、水田洋訳『社会における個人』ミネルヴァ書房、一九七二年]。高島善哉『アダム・スミスの市民社会体系』岩波書店、一九七四年。水田洋『アダム・スミス研究』未来社。同訳、アダム・スミス『道徳感情論』筑摩書房、一九七三年。巻末「解説」。星野彰男『アダム・スミスの思想像』新評論、一九七六年。その他。
- (9) Marx Engels Werke, Dietz Verlag, Berlin. [『MEW』第47巻] Bd. 23, S. 645—646.

II 初期マルクスの社会像認識

上述の問題意識からした場合、出発点として注目されるのは、一八四四年時点におけるマルクスの労働のとりえ

方、それと価値概念との結びつけ方である。ここでは、その点から順次見てゆくことにしよう。

マルクスの場合、労働のとらえ方としてまず注目されるのは、いわゆる「類的存在 *Gattungswesen*」と訳されているものである。この用語がはっきりと使用され始めたのは『ユダヤ人問題』(一八四三年八月から二月に執筆)のときからであろう。¹⁰⁾この『ユダヤ人問題』は一八四四年の『独仏年誌』に『ヘーゲル法哲学批判序説』(一八四三年末から一八四四年一月に執筆)といっしょに発表されたものであるが、このあと『経済学ノート』や『経済学・哲学手稿』等のなかでも、この「類的存在」や「類的生活」という言葉がさかんに使用されているが、これらはいわゆる「疎外 *Entfremdung*」論とかかわって出てくるものである。¹¹⁾「疎外」の問題というのは、労働生産物からの「疎外」、労働からの「疎外」、「類的存在」からの「疎外」、さらに人間からの人間の「疎外」という問題に整理することができる。このこと自体はひとつの大きな問題になるわけだが、ここで問題にしたいのは、「疎外」という関係のもとで理解されている労働そのもの、人間の本来的な存在様式そのものについてである。つまり、「疎外」という理解を前提にする以上、「疎外された状態」と「疎外されない状態」という関係がどうしても最初から対比的に出てこざるをえなくなる。こうした考え方は、もちろんスミスには見られない。マルクスの場合には、「疎外された状態」と「疎外されない状態」とを対比的にとらえるという思考から出発しているが、そうすると、「疎外されない状態」つまり人間の本来的なあり方というのはどういうあり方を考えていたのかということが当然問題になるであろう。この点に着目してスミスをふり返って見ることから、両者の対照的な性格ははっきりしてくることになるであろう。

まず一八四四年の時点で言えば、マルクスは、本来的な人間生活のあり方が「私有財産」(「私的所有」)によって「疎外」されているというように、「私的所有」の概念を基軸にして説こうとしている。その説き方のなかでいく

つか注目すべき点をあげておけば以下のとおりである。⁽¹²⁾

まず第一に、マルクスは、人間の本来的なあり方、「疎外されない状態」での人間労働のあり方をどういうあり方として考えていたのであろうか。当時のマルクスの言葉で言えば、それは、まず「労働」そのものを人間の「本来的な生命発現」としてとらえ、この労働を即「社会的な生命発現」としてとらえたうえで、そのような「生命発現」が可能であるような状態が本来的な最も望ましい状態だと考えられていたと言えよう。ところが実際には「私的所有」のためにそうはなっていないということから、「疎外」の問題が提起されることになっている。つまり、マルクスの場合には、労働を即「社会的生命発現」という形でとらえるということが根本になっているように思われる。したがって、個人の存在様式、すなわちマルクスにおける本来的な人間像そのものも、労働を当初から「社会的な生命発現」という性格をもつべきものとする観点からのものであって、この点にスマスとは対照的なマルクスの労働把握の最も特徴的な点が見いだされる。⁽¹³⁾

第二点は、マルクスが従来の経済学説を検討しているところと関連しているが、細かな点はともかくとして結論的に言えば、彼は資本主義社会を構成している三大階級を二大階級に収斂させていって、「私的所有」の関係による「労働疎外」を事実上労働と資本との対立関係としてとらえ、結局二大階級論の観点から出発することになっている、とすることができ。つまり、マルクスは、重商主義、重農主義、アダム・スマスのそれぞれを検討しているが、そのさい彼は、重商主義の場合には貴金属 \parallel 貨幣が富とされてきたのにたいし、重農主義の場合には農業という特定の部面にかぎって生産的労働が認められているというように理解しており、さらにスマスの場合には富の普遍的本質として労働がとらえられ、そのかぎりではスマスのほうが進んでいると評価している。そして、このような過程が「疎外」との関係でとらえ返されて、二大階級論へと収斂されることになっている。つまり、労働者の

ほうは所有していない「無所有」であり、資本家の側は「所有」ということになり、その意味で、この時期には資本家と労働者との二大階級の關係は「所有と無所有との対立」という形でとらえられていた。¹⁴もちろん、このようなマルクスの思考過程のなかには、『ユダヤ人問題』に見られるような宗教問題もあり、さらに市民社会論や国家の問題等々もはいつてくるが、それらの問題はここでは省略することにして、基本的な点だけをおさえておけば、「無所有と所有との対立」という形で「労働と資本との対立」が表わされているというように整理することができ。そして、上述のような「疎外された状態」と「疎外されない状態」という対比的思考の基礎には、この「疎外された状態」を積極的に止揚して共産主義の社会へという社会主義思想の見地からする歴史的運動にたいする積極的主張があったことは言うまでもない。

その点はともかく、マルクスのこのような「労働」、「疎外」に関する認識は、同じ『独仏年誌』に『国民経済学批判大綱』を書いたエンゲルスと比べてみれば、かなり対照的なものであった。¹⁵マルクスの場合には「疎外」の問題から出発して「所有と無所有との対立」を見だし、人間生活の本来のなあり方の問題として「労働」の問題を取りあげ、それを「類」的なものとして、そこに本質的な、本源的な人間生活の状態を見いだすという考え方になっている。このような考え方は、ある意味では、ヘーゲルからの影響だと言えるし、また、もちろんフョイエルバッハの『キリスト教の本質』の第二版を読んだときの影響等々から出てきたものだとも考えられるが、その詳細はここでは省略せざるをえない。

このように見てくると、本来のな人間のあり方という問題が、アダム・スミスの場合には、マルクスのように「類」概念でとらえられているのではなく、「個」の概念でとらえられており、しかも、この「個」の概念つまり個人のなかに社会形成の原理を入れてしまっているという、まったく対照的な把握になっていることが判明する。¹⁶

このような一八四四年の時点におけるマルクスの眼からスミスを見ると、この「個」のとらえ方はどうしてもエゴイズムとしてしか見られず、したがって「分業(労働の分割)」といつてもそれは「疎外された労働」そのものの社会性を言っているだけであり、また「交換」というのもスミスの言うような人間の本性に基づくものではなくてエゴイズムを動機とした「欲得すくの交換 merenary exchange」であるといふようにしか考えられなくなってくる。こうして、マルクスとスミスとは、社会的諸関係そのものの形成原理の根本のところ、つまり人間生活の本来的なあり方というところで喰い違つており、その点がすでにこの一八四四年の時点ではっきりと出ているのではないかと思われる。

つまりスミスの場合には、個人は「交換性向 trucking disposition」を生来的にもつており、同じく生来的な「同感」の原理に基づいて生来的な「利己心 self-love」を發動すれば、そこに社会がおのずから形成されてくることになり、こうして「分業」が徹底すればそこからおのずから「商業社会 commercial society」が出現するというように理解されている。ところがマルクスの場合には、この一八四四年の出発点のところ、個人と社会という点にしぼつて言うスミスとは根本的に喰い違つていたために、マルクス自身のスミスにたいする批判の眼は、スミスの本来的なものを理解したうえでその批判にはなっていないのではないかと考えられる。個人の「利己心」はエゴイズムであり、交換は「欲得すくの交換」であつて、だから結局スミスの言う社会は「欲求の体系」としてでき上がってくる——これがスミスの市民社会にたいするマルクスの批判的なとらえ方になっていると思われる。このようなスミスとの根本的な認識のズレが、——このあとマルクスは経済学批判体系を進めてゆくことになるが——、ずっと尾を引いてそのまま『資本論』にまで達しているのではないであらうか。¹⁷⁾

さらにもうひとつ一八四四年の時点で注目しておかなければならないことは、貨幣把握の問題である。貨幣のと

らえ方は、ジェイムズ・ステュアートとアダム・スミス、言い換えれば『経済学原理』と『諸国民の富』という二つの経済学体系の性格の相違を理解する場合の指標としてよく取りあげられる。マルクスの理解からすれば、この貨幣把握の相違が、ステュアートとスミスとを結局「抽象的な対立」に終わらせることになった指標と考えられており、スミスはステュアートにたいして十分な批判を行なっていないということになっているが、しかしこの時点で果たしてマルクス自身において貨幣把握が十分にできていたのかどうかということを考えてみると、この点にもなかなか理解しがたいものが当時のマルクスの指摘のなかには多く残されていたと言える。⁽⁸³⁾

注(81) Karl Marx, „Zur Judenfrage,“ *Deutsch-Französische Jahrbücher*, Paris 1844; in *MEW*, Bd. 1, 20『ユダヤ人問題』のなかでマルクスは、「現実の人間は利己的な [egoistischen] 個人の姿においてはじめて認められ、真の人間は抽象的な公民 [citoyen] の姿においてはじめて認められる」という理解から、「現実の個体的な [individuelle] 人間が、抽象的な公民を自分のなかに取り戻し、個体的な人間でありながら、その経験的生活、その個人的労働、その個人的諸関係のなかで、類的存在 [Gattungswesen] となったとき」にはじめて「人間解放」が完遂されると述べている (*MEW*, Bd. 1, S. 370)。したがってここでは、「類的存在」としての人間が、「真の人間」的存在としてとらえられていることがわかる。

『ユダヤ人問題』と『ヘーゲル法哲学批判序説』との二論文について詳しくは、時永淑『経済学史』、改訂増補版、法政大学出版局、一九七一年、三五五―三五九ページ、および、『古典派経済学と資本論』、三二〇―三一五ページを参照されたい。なお、『ユダヤ人問題』をはじめとするいわゆる初期マルクスの諸著作を学史的に見てゆく場合、後年の「経済学批判」体系における基本視角の形成との関連を念頭においておくべきであろう。私の上掲の二つの著書はその点に力点をおくところ。

(82) *MEW*, Ergänzungsband, Teil 1, S. 510—522.

「疎外」論を中心とした『経済学・哲学手稿』の理論的な問題については、時永『経済学史』、三六〇―三六六ページを参照されたい。なお、『経済学・哲学手稿』と『経済学ノート』との執筆順序をはじめとする具体的な資料考証について

は次の論文を参照された。Nikolai I. Lapin, „Vergleichende Analyse der drei Quellen des Einkommens in den *Ökonomisch-philosophischen Manuskripten von Marx*“, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, Jg. 17, H. 2, 1969 [細見英訳, 『思想』一九七一年三月号所収]。山中隆次『経済学・哲学草稿』と『披粋ノート』の関係・ロービン論文によせて、『思想』一九七一年十一月号。山中隆次訳, J・ローヤン「いわゆる『一八四四年経済学・哲学草稿』問題：ハマルクス没後百年記念リントツ集會報告」, 『思想』一九八三年八月号。

(12) この問題については、拙稿「スマイスとマルクスにおける二重の社会像」「前掲『古典派経済学と資本論』」第二部Ⅱに所収)の第二項で、スマイスとの対比を念頭におきながら立ち入った整理をしておいた。以下、同論文を合わせて参照されたい。

(13) 前掲『古典派経済学と資本論』、一七六ページ。

(14) 同前、一七七ページ。

(15) マルクスとエンゲルスとの出発点の相違については次の論文を参照されたい。時永淑「マルクスにおける『相対的過剰人口』論の成立に関する一考察」、法政大学『経済志林』二五—一、一九五七年二月、「マルクスにおける『相対的過剰人口』論の成立について(続)」、『経済志林』二五—三、一九五七年七月。

(16) 前掲『古典派経済学と資本論』、一七七一—一七八ページ。

(17) 同前、一七八—一八一ページ。

(18) 同前、一八一—一八四ページ。

Ⅲ 「経済学批判」体系化の基本視角

以上のような一八四四年の時点の問題を念頭において、今度は一八四五年以降について、マルクスがどのようにスマイスを批判しているのか、また、反面からすれば、批判し尽くせない問題を残すことになったのか、そして、こ

の点が『資本論』でどのような形で残っているのか、ということを追ってゆくことにしよう。

一八四五年から四六年にかけて、マルクスは『ドイツ・イデオロギー』をエンゲルスとともに書いている。その内容にはいろいろと問題があることは周知のとおりであるが、ここではその点に立ち入ることは省略したい。⁽⁹⁾マルクスが経済学批判の「導きの糸」として取り出してきた「唯物史観」は、一八四七年の『哲学の貧困』（一八四六—四七年執筆）においてかなり明確に定式化されている。しかし、この『哲学の貧困』では、直接にブルドンを批判の相手として、ブルドン主義を批判しようとする意図が積極的に出ている。マルクスによれば、ブルドンはリカードウから自分の結論を引き出しているが、そのブルドンが問題にしていることを見れば、それは要するに生産を問題にしているのではなく、交換、流通の場面だけを問題にしているにすぎない。ところが私的な交換の根底には階級対立があり、この階級対立つまり「生産関係」がなければ「私的交換」はありえないのだという主張、これがマルクスのこの時点での主張である。⁽¹⁰⁾

こうして、ここでは「生産関係」という概念が非常にはっきりと出てきているが、しかし反面から見ると、ここでマルクスが交換という場合、それは実は労働生産物の交換であると同時に労働の交換でもあるというように理解されており、しかもこの労働には、一八四四年の時点に見られたような「類」的な労働、「類的存在」としての労働、「社会的な生命発現」としての労働という理解が裏側につきまといっている。つまり、このような意味での労働が、ブルドンの言う私的な交換の裏側に本来的な労働の性格として前提されており、その観点から前述のようなブルドンにたいする批判が行われているのではないかと考えられる。とすると、『哲学の貧困』のところでマルクスがリカードウ的な労働価値論を受容しているというのは、リカードウが分配論を主題として実はそれを社会的労働の三大階級への配分論として考察していた点に留意して、この点をブルドンが見逃しているという点でリカードウ

を評価するようになったのだ、と考えることができる。したがって、商品交換を当初から対象化された社会的労働そのものの交換としてとらえるという点では、マルクスはリカードウの労働価値説と共通していたわけであり、しかもその労働が、マルクスの場合には、本来的に人間の「社会的な生命発現」であるべきものだとする基礎認識があって、そのうえで階級対立を考えることになっているのだ、と言うことができよう。

この点は同じ一八四七年の末に行なわれた講演『賃労働と資本』では、いっそうはっきりとしている。つまり、資本という概念をそこでははっきりと「生産関係」——「社会的な生産関係」、「ブルジョア的な生産関係」——としてとらえ、資本の本質は、「生きている労働」が「蓄積された労働」のためにその交換価値をふやしてゆく手段として役立つことだ、という理解を示している。⁽²¹⁾しかしこの表現も、ある意味では非常にリカードウ的な表現である。また、資本を「蓄積された労働」としてとらえ、その理解から「生産関係」を資本関係としてとらえるという理解は、剰余価値生産の理論的な説明を可能にする基礎となったが、資本という概念をこのように「生産関係」として、つまり価値を増殖し剰余価値を生産するという側面でのみとらえるという理解は、一八四四年の時点から考えてみると、「所有」と「無所有」との対立という考え方を発展させたものだと考えることができる。

こうした考え方は——マルクスはやがてロンドンへ亡命してそこで本格的な経済学研究に取りかかるわけだが——、『経済学批判要綱』のなかではっきりと現われてくる。⁽²²⁾要するに、『哲学の貧困』でブルドンを批判したさいの、表面から見れば確かに「私的交換」つまり商品交換にはなっているけれども、その背後に階級対立がなければ「私的交換」もありえないのだという考え方がそれである。このような「私的交換」の過程を見る面と、その背後に階級の敵対関係を見る面——先の資本の理解で言えば、資本は「蓄積された労働」によって「生きている労働」を利用し交換価値をふやす手段だという考え方——、このように二つの側面に分けて考える考え方が、『要綱』で

は非常にはっきりと出てくる。⁽²³⁾ 社会主義者であるマルクスにとっては、当然、この二つに分けた側面のうちの第二の側面のほうが重視され、それが基本となって分析が進められてゆくことになる。これにたいして、表面の交換の側面——これは一応「自由と平等」のように見えると述べられているが——のほうは分析が遅れてゆくと同時に、前述したように、交換というのが同時に労働の交換と解され、労働と不可分な関係にあるとされているために、表面の交換もそのようなものとしてとらえられ、価値形態論の解明は不十分のままに残されている。

こうして『要綱』では、まず最初に「貨幣に関する章」と「資本に関する章」とが考察されているが、最後のところでようやく「価値」という表現で事実上「貨幣に関する章」に先行して説かれなくてはならない問題が出てくることになっている。しかもこの「価値」の箇所では、「商品」は「ブルジョアの富が現われる最初の範疇」であると述べられてはいるものの、それと並んで「交換価値はこの体制の最も単純な、最も抽象的な表現として現われる」というようにも指摘されており、「商品」を出発点とするのではなく、まだ「価値」を出発点とする認識のほうが基本的であったということがわかる。⁽²⁴⁾ こうしてマルクスは、上述の二つの側面に分けたうちの第二の側面を検討してゆくことになり、資本と賃労働との関係のもとでの剰余価値生産の問題の解明に力点を置くことになっている。

その後のマルクスの研究経過については、簡略化のために、マルクスがいくつか書き残している「経済学批判のプラン」をとりあげ、⁽²⁵⁾ それを指標にしつつ、ここでの論点の考察を進めてゆくことにしよう。

まず一八五七年の八月末に、マルクスはいわゆる「経済学批判の序説」を書いているが、そのなかの「3、経済学の方法」の最後のところに、はじめて「プラン」(「五分割プラン」)と呼ばれているものが出てくる。⁽²⁶⁾ その「プラン」を見ると、第一の項目として「一般的な抽象的な諸規定。それは多かれ少なかれすべての社会形態にあてはま

る。……」という表現がある。これは、生産が分配や交換や消費を規定するという理解を基礎として出てきたものである。マルクスは、この「一般的な抽象的な諸規定」を最初に前提して、そのうえで、第二に「ブルジョア社会の内的編成をなして、また基本的諸階級がその上に存立している諸範疇」、つまり「資本、賃労働、土地所有」を分析するという構想を示している。そして、そのあと、「三、ブルジョア社会の国家の形態での総括」、「四、生産の国際的關係」、「五、世界市場と恐慌」という構想を考えている。

こうして、「最も抽象的なもの」から始めるというときには、まず生産が最も根底におかれており、『要綱』のなかを見ても「生産一般に関する第一篇」、そしてそのなかの「交換価値に関する第一章」という表現が見られるが、同時に、他方では「交換価値、貨幣、価値に関する第一篇」という表現も見られることになっていて、何を出発点にしてどのように体系化してゆこうとしていたのか、出発点のところはマルクス自身かなり動揺していたと言えよう。

このあとを見てゆくと、一八五九年の『経済学批判』になると確かに出発点は「商品」になっている。しかし、それまでのところでは、たとえば一八五七年一月頃に書かれた「ノート第二冊」(『要綱』七冊のノート)の二つ(のあと)のほうにある「プラン」では、「一般性」、「特殊性」、「個別性」という論理的な表現が使用されており、また一八五八年の四月になるとようやく「六分割プラン」が構想されてくるが、その出発点も「価値」となっている。⁽²⁶⁾ すなわち、

I 資本一般

a 資本一般

1 価値

b 競争

c 信用

d 株式資本

2 貨幣

II 土地所有

3 資本

III 賃労働

① 資本の生産過程

IV 国家

② 資本の流通過程

V 外国貿易

③ 両者の統一または資本と利潤・利子

VI 世界市場

このように、『経済学批判』の前までは出発点は「価値」となっており、この一八五九年の『経済学批判』（第一分冊）ではじめて出発点は「商品」になっている。この『経済学批判』の「原初稿 (Dreizehner)」(一八五八年八月十日執筆)のなかで果たして出発点は「商品」とされていたのかどうか。この「原初稿」中その箇所に対応する原稿は現存しないが、種々の事情から見ても、ここではまだ「価値」とされていて「商品」に変更されてはいなかったものと考えられる。⁽³¹⁾

ところで、出発点が「価値」から「商品」に変更されるということは、単に用語上の問題としてかたづけられるわけにはいかない。それは、経済学の理論的体系化そのものを出発点において規定する関係にあるものとして、経済学の理論史上画期的な重要性をもつものであった。

だが、『経済学批判』冒頭におけるマルクスの「価値」から「商品」への変更は、単に用語だけの問題としてではなく、その変更の重要性を理論展開として示えたものだったかどうか。冒頭の商品分析を見るかぎりでも、そこには一八四四年当時からの見解が底流として残存している。それは、一面においては従来の古典派経済学者の理解を批判しマルクス独自の見解を展開させる動因となったものであるが、他面ではその古典派経済学批判をなお理論的に不十分なものとさせる動因にもなったものである。こうした点を冒頭の商品分析に限定して指摘しておけば次

のとおりである。

まず第一に「商品」は、「使用価値と価値」という二要因から成るものとしてではなく「使用価値と交換価値」という「二重の観点のもとに自らを表わす」ものとして把握されている。そして、「使用価値」は「一定の経済的関係である交換価値が自らを表わすさいの素材的な土台である」とされており、ここでは価値の規定と交換価値の規定とがまだ厳密には区別されていない。マルクスは、「交換価値はまず第一に、さまざまな使用価値が相互に交換されうる量的関係として現われる」と指摘しながら、他面では、「交換価値のうちには、個々の個人の労働時間が直接に、一般の労働時間として現われ、また個別化された労働のこの一般の性格がその労働の社会的性格として現われる」というようにも述べて、価値の実体規定を直接に交換価値のそれとして示すということにもなっている。この理解からするかぎり、マルクスはここで、「交換価値の分析から明らかなように、労働の社会的諸規定または社会的労働の諸規定——「特殊なあり方において社会的なそれ」——こそが「交換価値を生みだす労働の諸条件である」と言わざるをえないことになっている。われわれは、こうしたマルクスの「交換価値を生みだす労働」の理解のうちに、人間の労働を本来的に直接「抽象的、一般的かつ同質の労働」としてとらえ、労働を本来的に社会的労働という性格をもつべきものとする彼の見解を伺い知ることができる。⁽³²⁾しかも、こうした見解から実は、『資本論』の冒頭でも、商品の価値の実体としての人間労働の「一般的社会労働時間」「抽象的人間労働」としての性格を説くということになっている。『経済学批判』では、「労働の社会的性格」という場合、「社会的」といっても特殊なあり方での社会的である」というように説かれているが、この「特殊なあり方での社会的」というのがどういふことなのかという問題は解決されないうままに、ただ「社会的生産過程で日々行なわれている抽象」、そしてその「抽象」によって生み出される「抽象的人間労働」というような説き方に終始しているにすぎない。⁽³⁴⁾

こうした商品の「価値」の説き方は、やはり一八四四年時点における「類的存在」の理解に共通し、人間の労働を本来的に「社会的な生命発現」として把握する見解が底流になっていて、それが冒頭「商品」のもつ「交換価値」概念の規定として提示された関係にあると考えざるをえない。³⁶⁾

もうひとつ、価値の実体の説き方に関連して「価値の尺度」の問題に注目しておくべきであろう。この時期にマルクスは価値の「内在的尺度」にたいして「外在的尺度」があることを詳論している。この「外在的尺度」というのはもちろん貨幣のことを指しているが、「内在的尺度」というのは、実は「抽象的人間労働」、「労働時間」のことを指している。そしてマルクスは、「労働時間が価値の内在的尺度であるのに、なぜそれと並んでもうひとつの外在的尺度があるのか」という疑問をJ・グレイ批判として提起している。³⁶⁾しかし、それはグレイにたいして問いかけたというよりも、実はマルクス自身が自分に向かって問いかけている批判のように考えられる。というのは、「外在的尺度」の問題というのは、商品の価値がどのように表現されるのかということをも、まず貨幣の必然性として説明し、そしてその貨幣が、実際に個々の諸商品の価格を実現してゆくことを通じて諸商品の価値を尺度してゆくということを明らかにする問題であって、その意味では価値形態の分析がはっきりしてこないかぎり明らかにほされえない問題だからである。³⁷⁾しかも、この価値形態の分析は、周知のとおり『経済学批判』の段階ではまだはっきりとは説かれていない。つまり、この時期には、まだ商品の二要因である価値と使用価値との関係は十分には明らかにされているということができない。商品の使用価値の規定というのは、先の『要綱』の時点ではその頃のエンゲルスあての手紙に記されているように、「たんに価値の素材的前提として現われているだけで、この前提は当面はまったく経済的な形態規定の外に落ちる」とされており、問題は価値だとされ、しかもその価値は、前述のように「抽象的人間労働」だという規定にされてしまっていたわけである。³⁸⁾

このように、『要綱』では使用価値が価値から分離された形で考察されていたが、『経済学批判』の一八五九年段階でも、前述のように商品は「使用価値と交換価値という二重の観点のもとに自己を表わす」とされながら、両者は商品の二要因としてのその関係が明らかになされているとは言えない。⁽³⁹⁾この点がはっきりしてくるのに伴って、価値形態論もはっきりしてくる関係にある。いずれにしても、『経済学批判』では価値尺度の問題は「外在的尺度」と「内在的尺度」として二分化された形になっており、この関係をどう理解したらよいか、これはマルクス自身にとつてなお解明されなくてはならない大きな問題として最後まで残されることになったと言える。⁽⁴⁰⁾

注(19) 『ドイツ・イデオロギー』における唯物史観の形成の問題については、時永『経済学史』三六六—三七三ページを参照されたい。また、『ドイツ・イデオロギー』の執筆時期などに関する資料考証については、花崎卓平訳『ドイツ・イデオロギー』合同新書版。廣松渉『マルクス主義の成立過程』至誠堂一九七四年などを参照された。

(20) Karl Marx, *Misère de al Philosophie*, Paris, Bruxelles, 1847; in *MEW*, Bd. 4, S. 105.

この点については、時永『経済学史』三七二—三七九ページ、また、『古典派経済学と資本論』三一九—三二二ページを参照された。

(21) Karl Marx, „Lohnarbeit und Kapital,“ *Neue Rheinische Zeitung*, Nr. 264—267, 5—11. April 1849; in *MEW*, Bd. 6, S. 408—409.

この点については、時永『経済学史』三八〇—三九二ページ、および、『古典派経済学と資本論』三二二—三二四ページを参照された。

(22) この間の経過については、前掲『古典派経済学と資本論』三二五—三四二ページ、また、Fred E. Schradder, *Restoration und Revolution: Die Vorarbeiten zum „Kapital“ von Karl Marx in seinen Studienheften 1850—1958*, Hildesheim 1980, S. 15—103 を参照された。

(23) Karl Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie*, Dietz Verlag Berlin 1963, S. 185. (以下 *Grundrisse* 参照)。

『要綱』と「経済学批判」体系の基本視角との関連については、時永『経済学史』、三九二―四一四ページを、また『要綱』の理論的な諸問題については、前掲『古典派経済学と資本論』、三六〇―三八二ページを参照されたい。

- (24) Marx, *Grundrisse*, S. 763.
- (25) 「ラン」の変遷過程の詳細については、前掲『古典派経済学と資本論』、三四六―三五九ページを参照されたい。
- (26) Marx, *Grundrisse*, S. 28―29.
- (27) Marx, *Grundrisse*, S. 226.
- (28) Marx, *Grundrisse*, S. 138.
- (29) Marx, *Grundrisse*, S. 186―187.
- (30) この「六分割ラン」は、一八五八年二月二十二日および三月十一日付のマルクスからラサールあての手紙、および同年四月二日付のマルクスからエンゲルスあての手紙によって推定されたものである。岡崎次郎訳『資本論書簡』、大月書店、第一分冊、一九七一年、二三七―二四六、二四八―二五三ページを見よ。
- (31) 「原初稿」の出発点に関する理論的な考察については、前掲『古典派経済学と資本論』、三八七―三九五ページを参照されたい。
- (32) *MEW*, Bd. 13, S. 16―17.
- (33) *MEW*, Bd. 13, S. 19.
- (34) *MEW*, Bd. 13, S. 18.
- (35) 『経済学批判』の商品論の問題点については、前掲『古典派経済学と資本論』、三九八―四〇二ページを参照されたい。なお、『資本論』でも冒頭商品論の箇所では価値の主体としての抽象的人間労働を「労働生産物の使用価値の捨象」によって導き出し、それが「社会的に必要な労働」として確定される「換算」の問題を「一つの社会的過程によって生産者の背後で確定される」というように説いていることは、周知のとおりである。
- (36) *MEW*, Bd. 13, S. 67.
- (37) 『経済学批判』の貨幣論の問題点については、前掲『古典派経済学と資本論』、四〇一―四〇八ページを参照されたい。

(38) 一八五八年四月二日付のマルクスからエンゲルスあての手紙、岡崎訳『資本論書簡』、1、大月書店、二四九ページ。

Marx, *Grundrisse*, S. 763.

(39) *MW*, Bd. 13, S. 14.

(40) この点については、前掲拙稿「スミスとマルクスとにおける二重の社会像」の第三項を参照されたい。

IV スミス労働価値論の特徴

では、この価値尺度と価値実体の問題はアダム・スミスの場合にはどうなっているのか。われわれの観点からすれば、『諸国民の富』第一篇第一—三章の分業論と、そのあと第四—六章、特に第五章冒頭の三つのパラグラフの叙述などが問題になるであろう。⁽⁴¹⁾ これらの箇所のスミスの叙述に見られる彼の価値の実体、源泉、尺度の説明については、本当に労働を基礎にしているのかどうか、実はそのようには言い切れない面があるのではないかとこの疑問が出てくることは予想される。⁽⁴²⁾ 確かにスミスのその後の叙述のなかには、たとえば、第二篇第五章の「資本のさまざまな用途について」の箇所に見られるように、農業では自然も人間といっしょに労働し、また役畜も人間と同様に多くの価値を再生産するという叙述があるのは事実である。そのためにスミスは、まず第一に農業に資本を投下するのが有利であると言っているわけである。⁽⁴³⁾

しかし、『諸国民の富』全体の叙述の詳細な検討はともかく、とりわけ第一篇の前述の箇所に注目するならば、そこではまったく対照的に、まず序文冒頭のところで「必需品、便益品を本源的に供給する源泉」は労働であると述べている箇所があり、⁽⁴⁴⁾ それに続いて分業論が展開されており、第一篇第五章では労働は「すべての物にたいして

支払われた代価であり、本源的購買貨幣 original purchase-money であった」という表現などのあることが注目される。⁽⁴⁶⁾これらの点に注目して見てゆくと、スミスは、いろいろな物がいろいろな関係でつくられるけれども、究極的に突きつめてゆけば、すべての物をつくるものはやはり人間の労働だと考えていたのではないであろうか。だからこそ、その労働は「生活必需品や便益品」という富を「本源的に供給する源泉」だと考え、こうした理解から先の第五章の叙述に見られるように、労働はもともと自然にたいして支払われる「貨幣」であり、生産物はその「代価」として自然から与えられるものだと考えたのではないであろうか。そして、このように生産物を労働の「代価」または「報酬」としてとらえたことから、実は、労働を「労苦と煩勞 toil and trouble」だとする理解も出てきたのではないかと考えられる。⁽⁴⁶⁾いずれにしても、分業としての労働一般を素材的富の源泉として把握する見地がアダム・スミスの根底にあったこと自体は否定できない事実であろう。

さらに進んで、スミスが三階級からなる社会を見ていたことも否定できない事実であって、⁽⁴⁷⁾そのために、「諸国民の富」の叙述内容は理論的な整合性の問題を残すことにもなっているが、その点はともかくと、スミスは究極的にはマルクスの言う労働過程そのものままで考察を深めて、しかもその過程を、本源的には人間が個々に彼の労働を自然にたいして「貨幣」として支払い、その「代価」として生産物を獲得してくる関係としてとらえていたのではないかと考えられる。しかも、そこそが実はスミスの言う「経済人」の労働として把握されたものにはかならずなかつたと言える。とすれば、この「経済人」の労働は、もともとスミスの理解からすれば社会形成の原理をそれ自身のなかに生来的な「性向」としてもっているものであり、その点がすでに「分業」論として展開されていたこととなる。⁽⁴⁸⁾つまり、この「分業」論もその発生の原因は、周知のとおり、人間の生来的にもつ「交換性向」に基づくものとされていたわけであり、また、ミークがスミスの渡仏前の諸資料の検討のさいに手がかりとしていた問題、

つまり「分業は市場の広さによって制限される」というスミスの叙述にしてみても——ミックは、この叙述が「キヤナン・ノート」では適切な位置にあるということから、この「ノート」を渡仏前の最後の講義ノートだと判断しているが⁵⁰、スミスは人間の生来の「交換力の大きさ」によって決まるのだと言っているわけであり、やはり、個々の「経済人」の生来的な「交換」の性向に基づくものとして「市場の広さ」という社会的関係を考えていたのだと言えよう。

このような理解の仕方と違っているのは、たとえば久留間敏造氏の見解である⁵¹。久留間氏の考えでは、スミスの労働Ⅱ「本源的購買貨幣」という理解は、「賃労働と資本との交換関係から類推して歪曲した形で把握していたことが知られる」とされている⁵²。こうした見解からすると、三階級分割に基づく社会形態の成立のもとではじめて可能な労働力の商品化を前提してそこの資本関係から逆に「類推して歪曲した形」で労働過程をも対象にすることになっているのがスミスだということになり、そのために、スミスは人間と自然との関係、言い換えれば労働過程のところを、「人間と自然との間の交換の過程」として考え、「労働」を「各人が財貨の獲得のために支払わねばならぬ本源的な犠牲」と考えることになったのだということになる⁵³。

スミスが労働過程を人間と自然とのあいだの交換過程化してとらえていたということはそのとおりだと言えるが、しかしそれは、スミス自身に即して言えば、三階級分割の社会形態のもとではじめて可能になる資本関係から逆に「類推し歪曲した形で」労働過程を対象としたことに基づくものであったというよりは、むしろ先に述べたように、スミスに特有な自然法思想の形成とそれに基づく「経済人」の独自の把握から可能にされたものであったと解するほうが妥当ではないかと思われる。もちろん前者の側面がまったくなかったというわけではないが、後者の側面を欠落させたのでは、逆にスミス独自の思想にしても、それに基づく「経済人」の理解にしても、さらに分業論等々

のそれらにしてもスミスに即して十分納得のゆく形で理解できないのではないであらうか。こうした点は、スミスがなぜ労働それ自身の価値はけっして変動しないと考えたのか、またなぜ労働は「真実の尺度」だと主張したのかということ、彼の「経済人」の考え方そのものに基づいて解明するための基礎でもあると思われる。⁵⁴

スミスがよく使う「労働の価値」という言葉——マルクスはこの表現を「余計であり無意味である」と述べているが⁵⁵、この「労働の価値」というスミスの表現は、スミスが事実上労働過程そのものを対象にして、人間が自然にたいして「労働」を支払い、その代価として自然から本源的に生産物を獲得するという理解から、その生産物が「労働の価値」と解されることになっていたものと考えられる。したがって最も突きつめたところで考えてみると、スミスがこのような形で労働過程を交換過程化して理解していたということは、生来の「性向」として社会関係を形成しゆく性格をもった個人の労働を究極的に自然との関係でスミスなりに把握していたことを示すものと言うことができよう。このように、マルクスのいう「人間生活のあらゆる社会形態に等しく共通なものである」「労働過程」そのものを社会形成主体としての性格をもった個人の労働そのものと自然との関係として事実上把握しそれを——理論的には多くの欠陥を残しながらも——学説史上はじめて経済学の体系化の基礎とすることができたという点に、実はスミス経済学が古典派経済学としてもつ最大の特徴点を見いだすことができる。

註(41) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 2 vols., London 1776: in *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, 6 vols., Oxford 1976—83, vol. II, pp. 47—48. (以下「W. of N.」略す)

(42) このような問題は、藤塚知義氏が提起されている。すなわち「……スミスが『労働は本源的購買貨幣だ』といっていることを、『人間が自然にたいして労働をあたえて自然から生産物をもらうという、人間と自然とのあいだの交換になぞら

えて、生産をとらえているのだ』と解する見解があるが、スミスが比喩的に述べているこの記述を、そのように解釈することは無理であろう。スミスにおいては、むしろ『土地と労働の生産物』(produce of the land and labour)という従来の表現が随所にてでるのであって、人間と自然(土地)とのあいだで行なわれる自然の産物と労働との交換という把握の仕方、スミスにあてはめることは困難だと思ふ。〔『国富論』における労働価値論の成立…支配労働Ⅱ投下労働価値論の形成と古典派労働価値論の成立』、所収『国富論の成立』、経済学史学会編、岩波書店、一九七六年、一八一—一八二ページ、注4〕

(43) Smith, *W. of N.* pp. 363—364. 『諸国民の富』全体の叙述を見れば、労働価値論の側面と同時に重農主義的側面が見られることは周知のとおりである。この点は、たとえばR・L・ミークによっても学説史的に検討されている(「イギリスにおける重農主義と古典主義」、所収：吉田洋一訳『イギリス古典経済学』未来社、一九五六年)。だが、ここでは、この両面の存在を確定することが問題なのではない。ミークも指摘しているとおり、「スミスの重農主義への偏向」は、スミスの思想そのものが「その本質的において過渡的なものであった」ことを示すものとして確定しておけばよい(同訳書、六七、六九ページ)。ここでは、そのうえで、ミークが「スミスと一部の反重農主義者は、リカードウの用いるところとなった労働〔価値〕論の方向を、すでに示していた」(同訳書、九一ページ)と述べている視角から、スミスの労働価値論そのものを考察することが問題である。ただし、ミークのその指摘との関連では、次の点を注意しておかなくてはならない。すなわち、ミークは、スミスの労働価値論への方向が、「スミスの著作をリカードウ『原理』の観点から観察する場合のみ、特に意義あるものとして現われる」(同訳書、六七ページ)と指摘している点である。この指摘は、スミスの労働価値論の内容とリカードウのそれとの相違を念頭において読まれなくてはならない。ミーク自身は、その相違に触れていないが、われわれにとっては、同様に労働価値論と呼ばれながら、スミスのそれがリカードウのそれと本質的に相違していた点こそが問題である。むしろ、その点に、スミスの労働価値論が「その本質において過渡的なものであった」ことの学説史上の意義が見いだされるのであって、親近性からすれば、リカードウの労働価値説はマルクスのそれのほうに近かったといふことができる。この点は、マルクスの『経済学批判』体系が、スミスの『諸国民の富』よりも、むしろリカードウの『原理』を直接批判の対象として構築されたという観点から、改めて検討されるべき課題であろう。

(44) Smith, *W. of N.* p. 10.

- (45) Smith, *W. of N.* p. 48.
 (46) Smith, *W. of N.* p. 47.
 (47) Smith, *W. of N.* Bk. I, chap. 6.

スミスが三階級分割の社会像を想定し分析対象とするにいたった経緯については、資料的になお明確にされているとは言えないが、現在のごとく、R・L・ミークによる資料検証が最も興味深い論点を提示しているものとして注目される〔アダム・スミスと古典派の利潤論〕所収：時永淑訳『経済学とイデオロギー』、法政大学出版局、一九六九年、四三—四四ページを見よ。〕。

なお、スミスには、『道徳感情論』に見られるような独自の思想に支えられつつ、『諸国民の富』の冒頭の「分業」論を基礎にして設定した「商業社会 commercial society」像と、彼の現実観察に基づいて描かれた資本家、地主、労働者の三階級からなる社会像との、いわば二重の社会像が認められるが、この両者のあいだの理論的整合性の問題について詳しくは、時永『経済学史』第二篇第一章第三節、および、前掲拙稿「スミスとマルクスにおける二重の社会像」第四項を参照された。

- (48) Smith, *W. of N.* Bk. I, chap. 1—3.
 (49) Smith, *W. of N.* p. 31.
 (50) Meek, *ibid.*, pp. 33—42.
 (51) 久留間鮫造、玉野井芳郎『経済学史』、改版、岩波全書、一九七七年、九六—一〇〇ページ、注一。
 (52) 同前、九八ページ。
 (53) 同前、九八—九九ページ。
 (54) この点について詳しくは、前掲拙稿「スミスとマルクスにおける二重の社会像」第四項を参照された。
 (55) Karl Marx, *Theorien über den Mehrwert (Manuscript 1861—1863)*, in *MEGA II/3*, 2, S. 370. *以下は『諸国民の富』第五篇第五章の第二、三、四、五のなかで、*「それら〔諸商品〕はそれぞれ一定量の労働の価値 (the value of a certain quantity of labour)」を含んでおり、その一定量の労働の価値をわれわれは、その場合、それと等しい労働量の価値を含んでいるとみなされるものと交換するのである」(Smith, *W. of N.*, pp. 47—48) と述べているが、マルクスは

このなかの「一定量の労働の価値」という表現にたいして、「ここで価値という言葉は余計であり無意味である」と注記している。

Ⅳ 結 び

以上のように見てくれば、スミスの労働価値説がマルクスのそれとは——またリカードウのそれとも——かなり質的に相違していることは明らかであろう。マルクスの場合には、人間の「個人」としての存在を本源的に「社会的存在」として把握する傾向が当初から底流としてあったことから、商品経済の発展に媒介された資本主義社会の成立が「私的所有」の確立と同時に人間の「個人」としての社会的確立そのものをも可能にすることになったという歴史的事実を経済学批判の体系化の基礎として必ずしも十分に理論化できたとは言えない結果に終わっていると言えよう。「価値の実体」としての「労働」にしても、前述のように「外在的尺度」に対して「内在的尺度」を併置させる関係で問題にされており、『資本論』になると、冒頭の「商品」論ではじめて使用価値を捨象して価値の実体を説くという形になっている。⁶⁶しかし、使用価値を捨象するということは、実は「商品」そのものが相手の商品の使用価値をもって自分の商品の価値を表現しなければならないということから一商品金が貨幣となり個々の諸商品はいろいろな価格をもつということを明らかにする価値形態論の分析を出発点にして、現実には、その貨幣が産業資本の変態運動のうちにあるものとして、特定の使用価値の生産を目的とするのではなく価値増殖を目的としてどんな労働生産物をも商品として生産しようということになってはじめて論証されうる関係にある。

とすると、マルクスのように、冒頭から使用価値の捨象によって価値の実体として労働を説き、しかもその労働

をそれ自身本来的に社会的な性格をもつべきものとして導入し、さらにそのような同質な労働への還元をただ「一つの社会的過程によって生産者の背後で確定される」にすぎないとしてしまったのでは、どうしてもそこに無理が生ぜざるをえないことになる。⁽⁵⁷⁾この問題が最終的に困難な問題として出てくるのは、『資本論』第一巻第一篇の「商品と貨幣」を説いたところが単純商品生産社会的なイメージを残し、そのあと第三篇のところからが資本主義社会的なイメージになって、アダム・スミスとはまったく違った意味での二重の社会像のイメージが与えられているという事実である。この点が戦前から繰り返し議論の対象にされていることは言うまでもないであろう。⁽⁵⁸⁾

他面、マルクスがスミスの「労働の価値」という表現について、この場合の「価値」という語は「余計であり無意味である」と言ったのは、実は、マルクス自身がスミスの言う「労働の価値」を「労働力の価値」と解釈したうえで——つまり、スミスは事実上賃金を尺度にしているというマルクスの解釈のうえで——批判だったと言える。しかし、こうした解釈は、労働力の商品としての売買側面（流通側面）と、労働そのものによる価値形成増殖側面（生産側面）とに分けながら両側面が理論的体系のなかでもつ関係を必ずしも十分に説明できていなかったことによるものであって、この解釈によっては、なぜスミスが「労働」を「それ自体の価値がけっして変動しない」「真実の尺度」としたのかという点は、不明確なままに残らざるをえなかった。この点は、スミスにおける独自の不変の価値尺度論の問題として、リカードウのそれがいわゆる「価値法則の修正」の問題などとの関連で云々されたのとは違った性格をもつことが明らかにされなくてはならなかったと言える。スミスの場合は、社会的関係の形成主体としての個人の労働が事実上自然との関係で考察対象とされ、「労働過程」そのものを交換過程視することを通して、「労働」こそが「すべての商品の価値を、時と場所とのいかに問わず、評価し比較することのできる究極のかつ実質的標準である」とされたのである。この点がスミスにおいて彼の投下労働価値説と支配労働価値説

との両面を整合的に解釈しうる根拠になっている。しかし、リカードウにおいては、スミスのこうした点はまったく見落とされた。と同時に、リカードウにおいては、もはやその『原理』の理論体系は、スミスのように「労働過程」そのものを事実上考察の対象としそれを基礎とする関係において形成されることはなかった。リカードウの不変の価値尺度論がスミスのそれと異質であることの根拠も、実はこの点にあると言える。

したがって、前述のようなマルクスの、労働力の商品としての売買側面（流通部面）と、労働そのものによる価値形成増殖側面（生産部面）とを区分する分析視角からすれば、スミスにおける事実上の労働過程への着目をどのように批判の対象とするかが改めて問い直されなければならない問題だったと言えよう。ところが、マルクスの「経済学批判」の体系化は、スミスの理論体系よりもむしろリカードウの理論体系を積極的に批判の対象とすることによって構築された。マルクス自身、『剰余価値学説史』のなかでリカードウ体系の第一の難点は、資本と労働との交換——それが『価値の法則』に一致して行なわれること——が解決されていない点にあることを指摘している。⁽⁵⁹⁾だが、その「価値の法則」は、マルクスの場合には前述のようにその当初から「抽象的人間的労働」「社会的必要労働時間」を商品の価値の実体として説くことから出発したものであった。こうした説き方から出発するかぎり、商品・貨幣論を流通部面として分析とすべき『資本論』第一篇と、生産部面そのものを考察内容とすべき第三篇以下との結節点をなす第二篇「貨幣の資本への転化」の箇所に、スミス批判の不十分さがいわば集約的に現われざるをえない関係にある。しかも、この第二篇は、マルクスの上述の分析視角から見ても、『資本論』全三巻の理論体系の性格を根本的に左右する関係にある。マルクス自身における価値実体や価値尺度の論証方法がどのようになお未解決な問題を残していたか、そのためにこの第二篇の理論的展開がどのように首尾一貫しないものに終わらざるをえなかったか、こうした点の詳細はもはやここで考察すべき余裕はない。⁽⁶⁰⁾

ただ、最後に、スミスとマルクスとの対比的考察という観点からした場合、特に注目すべき論点と考えられる労働力の商品としての価値規定の特殊性という問題についてだけ簡単に触れて、以上の考察の結びとすることにしよう。

労働力の商品としての売買が流通部面に属することからすれば、それが商品形態をとるかぎりでは、一般商品と同様に、売り手と買い手とのあいだでの不断の価格変動のうちに価値を基準にせざるをえない傾向をもつ——つまり流通形態的規定を受け取らざるをえない。この点を一般商品——つまり労働生産物として不断に再生産される一般商品——について言えば、もともと個々別々に価格形態をもって存在する一般商品は、その個々の価格が貨幣の価値尺度機能によって実現されるというを通してはじめて、その社会的関係を確認されうる関係にあるということにはほかならない。だから、一般商品の場合には、個別的な価格の実現を通して、——つまり無政府的なように見える不断の価格変動のうちに——一定の基準への訂正傾向をもつということが、実は、諸商品の価格と価値との不一致を訂正する傾向そのものにはほかならないのであって、このように価値を基準にせざるをえない傾向をもつということがはじめて、使用価値を異にする個別的な諸商品の社会的関係としての存在を確定させることになる。

ところが、労働力商品の場合には、それは、もともと商品として生産されえないものであり、しかも資本主義経済のもとではただ資本にたいしてのみ商品として売買されるという関係にある。したがって、労働力は、それが商品化されているかぎりでは、前述のように、一般商品と同様の流通形態からする規定を受けざるをえない関係にあるが、しかし、一般商品のように、売り手と買い手との社会的関係が個々の価格の実現という流通形態を通ずることによって確認されうると言っただけではすまされない問題を含んでいる。この問題は、もともと商品として生産されえない労働力を一般商品と同様の流通形態をもって売買するという資本主義経済に特有な無理に起因している

難問であつて、労働力の場合には、その商品としての価値規定は、いわば一般商品と共通の流通形態の規定をもつて売買されることからするいわば擬制的規定にほかならない。労働力は、商品形態をもつて売買されても、それ自身はけつして一般商品のように、それ自身に「対象化された労働」としての価値の实体をもちうるものではないからである。このように労働力は商品としてはただ資本とのあいだでのみ流通形態からする価値規定を擬制として受け取る關係に立たされている。このことは、反面からすれば、労働力商品の価値が実は特殊歴史的な資本關係のもとは、賃金によって購入される生活資料の量つまり使用価値量によって決定されなければならず、しかもそれは、理論的には資本の蓄積過程が産業循環の過程として遂行されることの論証を通さなければ解明できない、ということを示すものにほかならない。

このように労働力商品の価値規定の特殊性を見てくるならば、労働力そのものを当初から商品形態のうちにあるものとして——つまり賃労働として存在するものとして——、それを一般商品と同様に、その個別的な価格形態の実現のうちに社会的關係が確認されることを説くだけではまったく不十分である。と同時に、反面からすれば、個々の労働者が単に賃金労働者としてのみ生産部面で労働する過程——したがって資本主義的生産過程そのもの——だけを對象として、ただ資本との關係においてのみ各労働者の個別的な労働が社会的性格をもつことを論証しようとしても、それは、マルクスのそのように当初から価値の实体として前提されていた「抽象的、一般的かつ同質の労働」と直接結合されて、事實上、資本の生産力の發展方法として解明されるにすぎず、人間の労働そのものが本来的にもつ独立の個別的な性格との關係を正確に論証できるかどうか、大いに疑問であらう。こうした点を考えてみただけでも、スミスがその『諸國民の富』のなかで、事實上「労働過程」分析を究極の基礎とし、しかもそれを個々の「經濟人」の「労働」と「生活必需品・便益品」つまり労働生産物との交換過程として把握しつつ、その点

に経済学の理論的体系化の根拠を置いていたという事実は、単に経済学史上の問題としてだけではなく、現代の問題として再検討されるべき重要性をもっていると言えよう。

ところで、上述のようなマルクスの「経済学批判」体系化の基本視角、とりわけ労働力商品化の問題と対比させて見た場合、そこには価値形態・価値尺度論等々が商品経済に特有な社会的関係確定のための流通形態であることの解明の不十分さ、さらに資本の生産過程そのものが特殊歴史的な流通形態としての資本を主体とするその流通形式のうちに包摂されて社会的に再生産されることに起因する労働力商品の擬制的な価値規定の不十分な解明等々の問題が残されていることが判明するであろう。同時に他面では、これらの点は、スミスが事実上考察の対象とした「労働過程」そのものの経済理論体系中の位置づけと、そこにおける人間の本来的な労働の存在様式の問題——つまり本来的に各個々の人間の労働としてのその存在様式と社会的関係をもつべきものとしての労働の存在様式との関連の問題、つまり「価値形成増殖過程」ではなく「労働過程」そのものにおける労働の二重性の論証問題にまで到達しなければ、根本的な解決は得られないであろう。

このように見てくれば、スミスはまだまだ死ぬわけにはいかない存在であり、むしろ現代に向かって、マルクスが意図した社会主義社会の根本的性格にかかわる理論的な諸問題を改めて提起している存在として注目されなければならぬことになる。われわれは、こうした諸問題の理論的解明を回避して、ただ、社会主義者としてのマルクスが『資本論』第一巻の末尾の章で主張したように、「資本主義的生産は、一つの自然的過程の必然性をもって、それ自身の否定を生みだす。それは否定の否定である。この否定は、私有〔Privateigentum〕を再建しはしないが、しかし、資本主義時代の成果を基礎とする個人的所有〔das individuelle Eigentum〕を「ぐくりだす」といふ社会主義的主張を繰り返すだけです。むしろ、資本主義という特殊歴史的な商品経済に特有な社

会的關係の確定方式の徹底的な解明を通すのでなければ、人間の労働が本来個人のそれとしてもつべき性格がどのように社会的關係のなかで生かされ、またどのように社会的に確定されるべきかという問題そのものに根本的な解決を与えることができないということこそが、現代の課題として考察されるべきであらう。スミスとマルクスとにおける労働価値説の相違をめぐる諸問題は、もちろん、上述のような理論上の諸問題に尽きるわけではない。しかし、それらが未解決のままに残されているということが、実は、究極的には理論そのものを基準とするべき關係にある社会主義社会の現状のなかに、どんなに多くの矛盾となつて露呈してきているかということ、ここで改めて指摘するまでもないであらう。

注(56) *MENY*, Bd. 23, S. 52—53.

(57) こうした点を最初に問題にしたのは、宇野弘藏氏であった。この問題は、すでに本文中でも指摘しておいたように、『資本論』の冒頭における価値実体の導出方法、価値形態論の説き方、貨幣の価値尺度機能のとらえ方、さらには価値法則の論証方法などの問題にまでつながるものであり、経済学の原理論の根幹を左右する問題である。宇野氏の所説については、その想源を示したものととして『資本論五十年』上・下、法政大学出版社、一九七〇、一九七三年、がとりわけ興味深さ。

(58) 労働価値説をはじめとする『資本論』の諸問題について、その理解を対照的に代表しているのは、宇野弘藏氏と久留間敏造氏との研究であると言えよう。両氏の対照的な『資本論』理解を生みだした想源も、実は、究極的にはアダム・スミスの労働価値説の理解の仕方のうちに見いだすことができるのではないかと考えられる。この点の立ち入った検討については、拙稿「アダム・スミスの労働＝本源の購買貨幣説に関する一考察…久留間敏造、宇野弘藏両氏の所説(向坂逸郎、宇野弘藏編『資本論研究』と宇野弘藏著『価値論』所収)を中心として」、『経済志林』81—2、一九七一年三月、を参照された。

(59) *MENY*, Bd. 26, 3. Tl., S. 177.

- (60) 「貨幣の資本への転化」問題解決のための私見の詳細は、時永淑『資本論』における「転化」問題、御茶の水書房、一九八一年、を参照されたい。
- (61) *MEW*, Bd. 23, S. 791.
- (62) 『資本論』第一巻第七篇第二四章のなかのマルクスのこの主張については、『現代マルクスレーニン主義事典』全三巻、社会思想社、一九八〇—八二年、所収「拙稿「資本主義の歴史的傾向」「否定の否定」の項を参照されたい。」
- 〔付記〕 本稿は、「アダム・スミスの会」の例会（一九八三年七月九日）の記録（『アダム・スミスの会会報』第四七号、一九八四年四月に収録）に基づいて今回書き換えたものである。